「雷同」を超えて「自得」へ――井上金峨の思想に関する考察

王杏芳

井上金峨は享保十七（一七三二）年に生まれ、天明四年（一七八四）に没した。これはちょうど荻生徂徠（一六六六〜一七二八）が世を去った後の時代にあたる。徂徠学が台頭する以前には、仁斎学が一時的に盛んになり、それに加えて朱子学や陽明学も根強く存続していた。すなわち、井上金峨が生きた時代の日本の儒学界には、朱子学・陽明学・仁斎学・徂徠学という四つの主要な思想資源が併存していた。

豊かな思想資源に直面する中で、新たな学問的な問題が浮上した。例えば、井上金峨が指摘する「その業を問はば、則ち宋儒氏の為す所を為すと曰ひ、陽明氏の為す所を為すと曰ひ、仁斎氏と曰ひ、徂徠氏と曰ふ。雷同剿説して、見る所有るに非ざる」（『師弁』）という「雷同」の問題である。伊藤仁斎や荻生徂徠に見られるように、人はそれぞれ異なり、考え方も様々であるという見解を受け継いだ井上金峨は、さらに「如し人みな己れと同じなれば、則ち千万人有りと雖も、亦た一人のみ。何の益かこれ有らん。」（『霞城講義』）と強く宣言していた。この「雷同」の問題をいかに打破し、新たな学問的地平を切り開くこと、すなわち「自得」を実現することは、彼にとって重要な課題であった。

本発表では、このような学問的状況を踏まえつつ、井上金峨が同・異をどう捉えていたのか、また「雷同」をいかに乗り越え、「自得」へと向かう道筋をどう考えていたのかを検討することで、彼の学問における特徴とその思想的意義を再評価していく。